

地域のアートプロジェクトに関わる実践報告

中 田 稔

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第55号抜刷）

報告・資料

地域のアートプロジェクトに関わる実践報告

A practical report on art project in a community setting

中 田 稔

キーワード：アートプロジェクト、地域活性化、現代アート

はじめに

本稿は、美作大学アートサークル、「みまさかアートプロジェクト」（以下：MAPと称す）による地域におけるアートプロジェクト活動について、その実践の経緯や結果を報告するものである。

MAPは、筆者が顧問となり2008年1月に結成された学生サークルである。現代アートによる表現やその鑑賞に興味を抱く有志数名が、結成前から様々なアートイベントに参加し、それがきっかけとなって発足したサークルであり、正式な組織としてはまだ2年にも満たない。現在、食物学科と児童学科を中心に約30名が登録メンバーとなっているが、常時活動に参加している学生は、14、5名程度である。また、所属する学生は、芸術系学部ではないので、美術に関して専門的な知識や技能を習得しているわけでも、コンクールや展覧会に向けての制作を目標としているわけでもなく、友人同士で気軽にアートを楽しむ感覚でサークル活動を行っている。

今までに学内では、風車を使ったインスタレーションや灯籠を使った展示などを行っている。また学外では2008年11月に津山市で行われた岡山県民文化祭総合フェスティバルに参加して、展示やワークショップを行うなど、趣味のサークルとは言え、徐々にその活動の場を広げつつある。

アートプロジェクトの隆盛

アートプロジェクトと呼ばれる美術の催しが、近年全国各地で盛んに行われている。2年に1度開催のビエンナーレや、3年に1度開催のトリエンナーレなど、特定の地域で一定期間開催される大規模なアートプロジェクトが毎年次々で行われている。特に本年（2009年）7月から9月にかけて新潟県中越地方で開催された「第4回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2009」は、このような大規模アートプロジェクトの代表例であり、2000年に行われた「第1回大地の芸術祭」が、昨今の大規模アートプロジェクトの先駆けとなったと言ってもよいだろう。

「大地の芸術祭」は、世界でも有数の豪雪地帯として知られ、過疎化が進むこの地域で、里山の活性化をテーマに、豊かな自然と現代アートを組み合わせるという手法で行われてきた世界最大規模の国際展覧会である。地域内の自然環境や空き家などを活用して現代アート作家が作品を制作したり、地域の住民とともに協働で表現活動を行ったりするなどの取り組みで、第1回には約16万人の観客を集めた。その後、第2回が約20万人、第3回が35万人と回を重ねる毎に着実に観客動員数は増え、また、展示作品数も300を超える状況である。

地域の活性化を1つの目的とした、このような大規模なアートプロジェクトは、「横浜トリエンナー

レ」、「水都大阪2009」など、山村だけでなく都市部でも開催されている。また、この他の地方自治体やNPOなどが主催する小・中規模のアートプロジェクトは、無数に存在し、益々増え続ける勢いである。

このように、アートプロジェクトが各地で頻繁に開催される背景には、何があるのだろうか。

これまで、美術作品の展示場所と言えば美術館や画廊に限られていた。一部には岡本太郎の作品に代表されるように、街角や公園に作品を展示するパブリックアートという分野もあるが、このアートプロジェクトは、それらとも違い「参加」や「協働」をキーワードに、今までの美術の世界の観念を覆している。

一体、このアートプロジェクトの持つ魅力とは何なのだろうか。また「参加」や「協働」を意図して行われる催しで、果たして本当に芸術や美術は、コミュニケーションツールと成り得るのだろうか。筆者自身、こんな問いを抱く中、MAPの学生と共に制作者側として今夏鳥取県で行われたアートプロジェクト（「岩美人・文化芸術祭プロジェクト」）に参加する機会を得た。

そこで自分自身がアートプロジェクトの中に身を置くことで、その魅力や、その地域なりの開催の背景を模索してみたいと考えた。

岩美 人・文化芸術祭プロジェクト

1. 概要

本プロジェクトは、アーティスト大久保英治がプロデュースして、2009年8月8日から8月23日までの2週間、鳥取県岩美町で行われたアートプロジェクトである。インディペンデント・キュレーター加藤泰三が、キュレーターを務め、筆者もサポーターという立場で、本プロジェクトに関わるようになった。

会場となった岩美町は、鳥取県の最東北端に位置し、東は兵庫県との県境にあり、北は日本海に面した人口約1万3千人の町である。本プロジェクトは、同町岩井地区の住民で組織する「ゆかむりの里灯籠流し実行委員会」が、2000年より毎年お盆の時期に行っ

きた灯籠流しのイベントが母体となり、2008年から大久保の光のアートを取り入れるなどして発展させたものである。主催者は同実行委員会で、以下の5つのプロジェクトが計画された。

- ①旧岩美病院ミュージアム・プロジェクト
- ②アートハウス・プロジェクト
- ③制作体験・ワークショップ
- ④光のランドアート
- ⑤灯籠流し

①のプロジェクトは、新病院建設のために廃院となった町立病院の空間を使って、大久保の作品をはじめ、地域の歴史や文化を紹介するプロジェクトであり、「生産」にスポットをあて、古い農機具の展示などが行われた。

また、④の光のランドアートは、大久保英治と地域住民との協働による作品展示で、川辺の公園を会場に、竹や和紙で制作された壮大な作品がライトアップされた。

⑤は、もともとお盆の送り火として地域の年中行事のひとつとして定着しているものである。

結果的には、どのプロジェクトにも学生が少なからず関わることになったが、当初の計画では②と③について、特にMAPの学生が主体となったプロジェクトを進めることが求められた。

②のアートハウス・プロジェクトは、集落内の空き家となった家をまるごと展示会場、或いはアート作品そのものとして活用していこうというプロジェクトである。また、空き家となってしばらく時間が経過した場を清掃したり、修繕したりして制作者自身がそこに滞在することで、その地域の文化に触れたり、住民とのコミュニケーションを図ったりしようとするものである。

この制作及び展示会場兼、居住空間となる住居は、主催者によって岩井地区内にある築70年の空き家を提供してもらった。岩井地区は、岩美町の東に位置し、山陰最古と言われる古くからの温泉が湧く地区で、集落内には3軒の老舗旅館の他、主に地域住民が利用する「ゆかむり共同浴場」がある。この共同浴場の近く

に位置する木造2階建ての空き家は、2年前まで男性が一人で居住していたが、この男性の死去に伴い、地域住民が管理を任されている物件であった。（写真1）



写真1 岩井地区内の空き家

また、③の制作体験・ワークショップについては、アートハウス内での来場者向けのもの他に、同地区内にある保育園で、園児を対象とした制作活動も実施することになった。

2. アートハウスプロジェクトの実施

MAPでは、結成以来個人制作による展示ではなく、サークル員の協働による制作を行ってきた。例えば、それは数百個の風車、または折り鶴の制作と展示などのように、誰でも容易に制作できる単体を多数制作し、それらを並べたり繋いだりすることで1つの集合体をつくり、その場の雰囲気を変化させるインスタレーションのような手法である。

アートハウスプロジェクトでも、このような経験を生かして協働作業によるインスタレーションを試みることにした。しかし、今回のプロジェクトは、展示場所が住居の内外と広く多様な上に、その場所に長期滞在するという、今までにない条件下での制作となった。

さらに、空き家という空間は、過去に人がそこで生活を営み、家族の歴史を築いてきた場である。このように有機的な空間で、その場に刻まれた記憶を手がか

りに、アートという手法で人が生きた証を再構築する作業は、MAPでは今までに経験のないことである。

そこで、制作に入る前に数名の学生と共に空き家の現地調査を行い、そこに流れていた70年の歳月と、主を失い止まってしまった時の感触を体感することから始めることにした。そして、地域の人への取材から、空き家になった経緯や、そこに暮らしていた家族の状況を知り、制作に向けてのイメージを膨らませた。

特に、制作に向けて大きなヒントとなったのは、この住居の玄関右手にある作業場である。その薄暗い土間は、現在地域の資材置き場として利用されていたが、壁の何か所かが無造作に塗り重ねられていた。案内してくれた人にその壁の理由を尋ねると、家業として左官屋を営んでいた主が、この作業場の壁を使って試し塗りをしていたのではないかということだった。さらに、この作業場の2階に上がると屋号の入った木製の脚立が見つかった。使い古された脚立と試し塗られた壁は、正に過ぎ去った時の重みと、そこで営まれた主の生き様を象徴するものであり、このアートハウスプロジェクトのコンセプトを決定づけるものとなった。

8月8日の制作開始日までに、実行委員会との打ち合わせや、制作材料の収集などのために、何度も現地に出向いた。また、学生達とも事前にミーティングを重ね、現地で取材してきた内容を伝えながら、本プロジェクトのコンセプトや制作方法を説明した。

今回の制作は、滞在が長期にわたる上に帰省時期と重なるため、多くの学生の参加は望めないかと思っただけ、制作開始の日には12名の参加があった。

作品は、前述の経緯から全体のテーマを「壁」とし、2階部分で3つの作品の展示を行い、外壁も風車で飾ることにした。また、左官屋を家業として生計を立て、この家で暮らしてきた主へ敬意を表して、アートハウスを「左官屋」と名付けた。

こうして6日間の制作期間に、延べ47人（1日平均7.8人）の学生と共に制作を行った。

まず、2階の6畳間に、メインとなる作品「追憶－蘇生」（写真2）を制作した。作品の中央に主が使用

していた木製の脚立を配し、その脚下に円を描くように制作物を並べた。これは、この家の作業場に残されていた木片に漆喰を塗り、それに貝殻を取り付けたものである。漆喰を塗るという行為で左官屋の仕事を再現し、貝殻で主な家を表現するとともに、それらをまた再構成する中で、新たな命や時間の始まりを表現した。

2階のもう1部屋には、「飛翔2009夏」(写真3)という作品を制作した。白い紙で折った折り鶴を糸で繋ぎ、天井からそれぞれ垂直に垂らして床に固定し、等間隔に配した。送風とライティングを工夫することで、吊した折り鶴の影がかすかに動きながら壁に映ることで、新たな壁の再生をイメージして制作した。

さらに、2階の廊下に面した窓に「いのしかちょう」(写真4)という作品を飾った。この作品は、「壁」というテーマからはやや逸脱してしまった感も

あるが、閉じられた窓も広く「壁」ととらえ、温泉街の遊興や娯楽をイメージして花札の図柄をステンドグラス風の切り絵で表現した。夜になると内部の明かりに照らされて外からも見る事ができたので、通りすがりの人にも注目してもらえた。この作品は、今まで手法とは違い、サークル員の個人制作に負うところが多かった。



写真2 作品「追憶 - 蘇生」



写真4 作品「いのしかちょう」



写真5 作品「岩井の新風」



写真3 作品「飛翔 2009 夏」

また、トタンの外壁には竹を格子状に組んで、約600個の風車を設置した。(作品名「岩井の新風」) 耐水紙で制作した風車は、大学内のプロジェクトでも使用したもので、普段見慣れた壁に風車を取り付けることにより場の雰囲気を変容させると共に、長く閉じられていた空き家に学生達の若く新しい風を送るというメッセージも込めて制作した。(写真5)

このように「壁」というテーマのもと、学生達との協働によって、空き家をまるごとアートとして再生することができた。

3. 制作体験・ワークショップの実施

「参加」や「協働」が、アートプロジェクトのキーワードになっていることは前述した。空き家に滞在し、アートを通して地域とのコミュニケーションを図る上で、制作体験やワークショップは欠かせない活動である。

今回は児童学科の学生が多く参加していることもあり、キュレーターや実行委員会の計らいで同地区内の保育園で、滞在5日目となる8月12日に年中・年長児19名と「染め紙による灯籠づくり」のワークショップを行った。(写真6)

初対面同士の活動で、学生も園児も最初は少し様子を見ながら接している感じだったが、制作を始めるとすぐに打ち解けていった。実行委員会に用意してもらった灯籠の骨組みに、子どもたちが蛇腹に折って色水で染めた和紙を貼っていくといった活動だったので、子どもにとっても、あまり困難な活動ではなく、集中して活動に取り組むことができた。また、予期せずに美しい模様ができる染め紙の魅力もあり、子どもたちは飽きることなく活動を楽しんでいた。

この時作った灯籠は、しばらく「共同浴場」の休憩室に飾られた後、灯籠流しの日に子どもたちの手で川に流された。川面に映る染め紙の灯籠の影は幻想的であった。



写真6 保育園でのワークショップ

この他にも、アートハウスの来場者に対して染め紙の灯籠づくりと、漆喰と貝がらによる制作体験の実施を毎日予定していた。滞在中に親子連れ等、何組かの参加はあったものの、予想したほどの参加者を得ることができなかった。このことから、自ら保育園に向向って行ったワークショップは、地域との繋がりを保つ上でも非常に貴重な事業だったと考えられる。

プロジェクトを終えて

本プロジェクトを振り返ると、筆者にとってもMAPの学生にとっても初めて経験することが多く、日常生活では得ることのできない貴重な体験の日々であったと言える。

特にアートハウスプロジェクトは、ただそこで作品を制作するだけに止まらず、そこに滞在し生活の拠点としたために、日々の生活全ての局面で、地域のコミュニティとどう繋がるかという課題と常に向き合う場となっていた。

若い学生にとっては、突然見ず知らずのコミュニティの中で、しかも普段つきあうことの少ない異世代の大人ばかりの地域住民と、いかにコミュニケーションを取るかということは、想像以上に難しいことだったかもしれない。また、一方では実行委員会に参加している住民はわかっている、その他の住民にとっては活動目的や得ても知れない若者が突然大挙して地域に入ってくるという状況は、理解し難いことだったはずである。

しかし、そうした相互の溝を少しずつ埋めることができたのは、アートを介しての関わりがあったからと言ってもいいだろう。

例えば、最初は遠巻きに見ていた地域の人たちも、学生達が毎日制作活動をする姿を見て興味を示し、何かの拍子に話しかけてくれるようになった。そして、アートハウスに足を運んで作品をみてもらうことで、作品を通しての会話が始まり、さらには作品を離れて家族や地域や学生生活、その他諸々の話まで会話が広がっていった。

また、地区内の交流の場となっている「共同浴場」では、我々は「アートの人」と呼ばれ、昼間のワークショップで出会った保育園の子どもや、その親と湯船に浸かりながら交流することもできた。さらに、前日まで素通りしていた人も、花札の図柄の作品を窓辺に展示した日には、足を止め話して行かれた。

これらは全て、アートがなければ成立し得なかったコミュニケーションである。

そして、学生とより近い距離で接してくれた実行委員の人たちとは、例えば竹を切ったり、組んだり、紐の結び方を教わったりする中で交流が深まった。農作業で鍛えた年配の人たちは、学生達が到底及ばない仕事上の技術や生活の知恵を携えていて、ちょっとしたコツを教わることも学生にとっては、新鮮な驚きだった。これらも制作を通しての交流である。(写真7)

また、異世代の交流という点から考えれば、保育園児とのワークショップも、教える側と教わる側が逆転しただけで、同じ構図だったと言える。



写真7 学生と地域住民との協働作業

このような体験から、改めてアートプロジェクトの意味を考えると、そこには、今の社会が失いつつある、共に汗を流してもものづくりをする中での人と人との繋がりの大切さが浮かび上がってくる。一昔前ならごく自然に、どこにでもあったはずの世代間の交流や地域住民同士の交流が希薄になった現代に、アートを通してそれらを体験することの心地よさが、アートプロジェクトの大きな魅力ではないだろうか。

また、アートが、このように人と人とを繋ぐコミュニケーションツールとなり始めた今、美術を取り巻く世界も大きく変貌していく可能性がある。地域との関わりの中でのアートの存在意義やアーティストの役割、さらには表現方法やワークショップの在り方など、今後もアートプロジェクトを続けていく上では、解決しなければならない課題も多いことも、体験を通して実感したことである。

おわりに

MAPの学生のほとんどは、8月16日の灯籠流しを終えてアートハウスから引き上げたが、8月8日の制作開始から23日の撤収までの2週間、1人の男子学生はずっと滞在を続けた。天候不順で真夏の太陽が照り輝く炎天下の日は少なかったとはいえ、冷房設備もテレビもない空き家での滞在は苛酷だったに違いない。しかし、彼にとっては一生忘れることのできない体験だったはずである。

美術や芸術を数居の高い特別なものと考えず、誰でも自由にアートと関わり、表現していく姿勢で、MAPの学生には、これからも様々なプロジェクトに積極的に挑んでもらいたいと願う。

謝 辞

本プロジェクトに参加するにあたり、ご協力下さいました岩井地区の皆様をはじめ、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

参考文献・資料

- 1) 北川フラム・大地の芸術祭実行委員会監修『2006 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2006』現代企画室 2007年5月
- 2) 「岩美人・文化・芸術祭プロジェクト企画案」加藤泰三2009年1月